

## #002 コラム 心に残る言葉

### 1. 値千金の言葉

1990年5月、九州工業大学情報工学部講堂の柿落としとして、筆者が第27回嘉村記念賞受賞講演を行ったとき、ドクタートルネード・フジタとして世界的に知られた藤田哲也教授（シカゴ大学）もアメリカからはるばる来学され「竜巻と航空宇宙工学」というお話をされた。式典後のパーティの席で、「先生のご研究成果は後世までも残る大金字塔ですね。あれほどスケールの大きい、すさまじい研究をよくも達成なさいましたね」と申し上げたところ、「そんなに誉めないでくださいよ。シカゴ大学のバイヤース教授にめぐり会えたこと、たまたま米空軍やNASAなどがたっぷりと研究費をくれ、惜しみなく実験の協力をしてくれたお陰なのです」。最後に「運が良かっただけです」と、ぼつりと結ばれたのであった。

さて、「世の中には金持ち、力持ち、権力持ちなどいろいろな人がいるが、つまるところ運の良い人間と悪い人間の二種類しか存在しない」と、フランスの詩人が何かに書いていたが、いつぞや横綱白鵬がある対談で、「世間では人間の成功は運次第と言っているようですが、神様は努力をした人間にしか運はくれないのだと私は思っています」と語ったことをふと思い出した。頂点に立っている人たちの言葉をあらためて深くかみしめる次第である。

イチローが過日、チーム移籍会見の席上で語った次の言葉もまた極めて含蓄深い。「私は『応援よろしくお願ひします』などとは決して言わない。応援は乞うものではなく、後からついてくるもので、皆さんが応援したくなるような選手に自分自身になれることが先決なのだ」。言葉にはその人の全人格が凝縮されるのだから、これまで並々ならぬ努力で次々に記録を更新し、とかく長距離打者が評価されがちな米球界に、走・攻・守にスピード感あふれる技を披露して新風を吹き込み、はなばなしい戦果を重ねながらも、過年、日本の国民栄誉賞を辞退したほどの人物の、ごく自然体の振る舞いなのであろうが、まことに敬服のほかない。

さて、土木学会初代会長古市公威氏が明治政府派遣渡仏留学生第1号としてパリで勉強中、そのあまりの猛勉強ぶりを見かねて、下宿屋のおばさんが「そんなに勉強ばかりしていると病気になる。少し遊びなさい」と忠告したところ、「僕が一日怠けると日本が一日遅れるのです」と答えたという。まさに当時の日本を背負った、愛国心

にあふれる言葉であり、当節、愛国心と言っただけで、やれナショナリズムだの、軍国主義だのと騒ぎたてる自虐偏狂平和ボケのマスコミに、その爪の垢を煎じて飲ませたい思いである。

### 2. 残されたもので生きよう

筆者が学位論文に着手したのは昭和30年で、当時は学位の完成におよそ10年かかるのが普通であった。今日のコンピューター・IT駆使の作業とは雲泥の差で、積年の悪戦苦闘ですっかり消耗し、論文提出と同時に胃潰瘍で入院するというのが通例であった。筆者が入院して間もなく、院長から「たつての頼みだ」と目の不自由な人物との同室を懇願された。

新たなストレス付加が予想され、内心不承不承な応諾だったのだが、同居人はすこぶる明るく軽やかで、しょっちゅう歌を口ずさみ、機知に富んだ冗談は飛ばすは、「お肩を揉みましよう」とサービスしてくれるはで、事態は思いがけない展開となり、いつの間にか我々の部屋は患者さんたちが気軽に押しかける賑やかなサロンとなった。退院に際し「ハンディを持った人間に対して僕は妙な先入観を持っていた。君の明るさに圧倒された」と言ったところ、「僕は目が見えないだけです。ヘレンケラーはさらに口も耳も使えなかったのです。『失ったものに未練を残すな。残されたもので生きよう』が僕のモットーなのです」と返ってきた。潰瘍を治療し、7歳も若い同居人から哲学まで学んだ、ありがたい入院生活であった。

以上、その道を究めた人々の、全人格を凝縮したと思われる金言を拾ってみた。

### 残されたもので生きよう 草萌える

未明



九州工業大学名誉教授

渡邊 明